

井筒俊彦のイスラーム思想史叙述の特徴 — 日本的イスラーム理解に及ぼした影響 —

池内 恵 IKEUCHI Satoshi

国際日本文化研究センター

井筒俊彦（1914-1993年）は日本のイスラーム理解において支配的な影響を与えてきた思想家である。特に日本の知識層が知的な関心事項としてのイスラームに興味を示す際には、もっぱら井筒の著作に依拠して理解がなされてきたと言っても過言ではない。ここでは、井筒俊彦のイスラーム思想史論の特性を、その由来と共に検討することで、日本におけるイスラーム世界認識の主要な一面を特定したい。¹

まずⅠで井筒俊彦の主要著作を課題別に分類して示しておく。その上で、Ⅱでは井筒のイスラーム思想史叙述の顕著な特徴として、法学を軽視し、神秘主義の潮流を重視していただけでなく、それらを価値判断において肯定的に評価していた点を示す。そしてⅢでは、このような井筒の固有の関心や価値判断が由来するところを探る。幼時に父から授かった内観法を中心とする独特の精神修養法が井筒の精神形成に与えた影響を論じる。その上でⅣでは、青年期にギリシア哲学の神秘主義的潮流に触れ、直接的な神秘的体験を言語分析の対象とすることに開眼したことが、井筒の思想史記述を将来にわたって規定する出発点であったことを示す。超越的存在の直感の言語化し得ない体験に繰り返し立ち返りつつ、その言語化を常に試みるという内在的な緊張や矛盾を含む営為こそが、井筒の一生涯にわたる学的関心の中核にあり、イスラーム思想史叙述もその関心の延長線上にあった。

Ⅰ. 井筒俊彦の主要著作

まず井筒俊彦の著作の全体像を示しておこう。井筒の主要著作は、大略下記の種別に分類するのが適当だろう。

1. 意味論をめぐる西欧言語による著作
2. コーランの翻訳
3. コーランとムハンマドをめぐる解釈
4. イスラーム思想史
5. 比較宗教哲学

1. 意味論をめぐる西欧言語による著作

Language and Magic: Studies in the Magical Function of Speech, 1955

The Structure of the Ethical Terms in the Koran (1959) 日本語訳『意味の構造——コーランにおける宗教道徳概念の分析——』（1972 ; 1992）

Ethico-religious Concepts in the Qur'an, 1966

God and Man in the Koran: Semantics of the Koranic Weltanschauung, 1964

The Key Philosophical Concepts in Sufism and Taoism, 1970

2. コーランの翻訳

- (1) 『コーラン』(上・中・下) 岩波書店(岩波文庫)、1957 - 58年
- (2) 『コーラン』(上・中・下) 改訳、岩波書店(岩波文庫)、1964年

3. コーランとムハンマドをめぐる解釈

- (1) 『マホメット』弘文堂、1952年(著者名表記は「井筒利彦」)
- (2) 『イスラーム生誕』人文書院、1979年((1)の増補改訂版)
- (3) 『マホメット』講談社学術文庫、1989年((1)(2)の再改訂版)
- (4) 『コーランを読む』岩波書店、1983年(岩波セミナーブックス1)

4. イスラーム思想史

- (1) 『アラビア思想史——回教神学と回教哲学——』博文館(興亜全書)、1941年
- (2) 『イスラーム思想史』岩波書店、1975年、((1)の増補改訂版)、(中公文庫、1991年)
- (3) 『イスラーム哲学の原像』岩波書店(岩波新書119)、1980年
- (4) 『イスラーム文化——その根柢にあるもの』岩波書店、1981年(岩波文庫、1991年)

5. 比較宗教哲学

- (1) 『神秘哲学(ギリシャの部)』光の書房、1949年
- (2) 『意識と本質——精神的東洋を求めて』岩波書店、1983年(岩波文庫、1991年)
- (3) 『東洋哲学覚書 意識の形而上学『大乘起信論』の哲学』中央公論社、1993年、(中公文庫 Biblio、2001年)

以上が井筒俊彦の主要な著作であるが、このうち日本語著作の多くは井筒俊彦著作集(1991年-1993年)に収録されている。

II. 井筒俊彦のイスラーム思想史叙述の特性

井筒のイスラーム叙述のどこに重点がおかれていたのか。これをみるには、広く流布した思想史概説『イスラーム思想史』を紐解くのがよい。4部からなる『イスラーム思想史』の構成は目次によれば以下のようになっている。

第1部「イスラーム神学——Kalam」

第2部「イスラーム神秘主義(スーフイズム)——Tasawwuf」

第3部「スコラ哲学(Falsafah)——東方イスラーム哲学の発展」

第4部「スコラ哲学 (Falsafah) ——西方イスラーム哲学の発展」

ここに明白なのは、井筒が取り上げる「イスラーム思想」とは、神秘主義とイスラーム哲学に限定されたものであることだ。井筒がイスラーム思想史を包括的に叙述する時に、対象から除外されるのは、宗教テキストの解釈の体系、すなわち神の啓示による法（シャリーア）から規範を導き出す法学（フィクフ）の分野である。

優れた『コーラン』翻訳や、啓示の本質を解明する『コーランを読む』が示すように、井筒がイスラームの最重要の性質が律法と規範の側面にあることを、もちろん知らないはずがない。法学が重要であることを認識しつつ、それを思想史の中ではあえて論じないのである。その理由を、『イスラーム思想史』の第一部第二章の冒頭で、井筒自身が記している。「法学はイスラーム学の中でも最も複雑多岐な科目であって到底僅かの頁にそのあらましを書くことはできぬ故、ここに記述することは真に基本的な、常識的な事柄に過ぎない」²。そして井筒はイスラーム法学に、著作集版の『イスラーム思想史』の全323頁のうち、わずか5頁しか割いていない。

そして、神秘主義と哲学についても、井筒は神秘主義に公然とシンパシーを表明し、肯定的価値判断をためらわない。その顕著な例が、『イスラーム哲学の原像』にみられる。ここではイブン・ルシュド（アヴェロエス）の合理主義哲学と、超越的存在の直接体験を中核とするイブン・アラビーの神秘主義哲学の対立を描き、井筒は明確に後者を上位におく。

西暦1198年のことです。モロッコで死んだこの哲学者アヴェロイスの遺骸がコルドバに運ばれてきました。当時のアラブ世界では重い荷物を運ぶときはたいていロバを使います。現代でもよく見る光景ですが、ロバの背中に振り分け荷物にしまして、右と左に重さの均衡をとって運びます。この場合にも片方の袋にはアヴェロイスの死骸、反対側の袋にのなかには世に有名なアリストテレスの『形而上学』の膨大な註釈をはじめとするアヴェロイスの著書がひと揃い全部入っていたといわれます。左右の均衡をこのようにしてとりながらロバがやってきます。それをイブン・アラビーは二人の親しい友たちといっしょに眺めておりました。これもまた運命的な匂いのする光景です。それを眺めながら、イブン・アラビーがこう申しました。「見るがいい、片方には哲学者の屍、もう一方には彼の全著作。アヴェロイス、彼はいったい自分の本当に望むところをあれて果たすことができたのだろうか」と³。

そして、神秘主義と法学的な宗教解釈では、明白に神秘主義を価値的に上位においている。『イスラーム文化』では、イスラーム教の思想史の発展を、一方では「法と倫理」の方向へ、他方では「内面への道」すなわち神秘主義の方向へ、分岐していくものとして描く。井筒は法規範の側面と神秘主義の側面は共にイスラーム教の不可欠の要素であることを確認するものの、それは形骸化への道でもあり、信仰の生命力を奪う、ある種の危機で

すらあると位置づける。

共同体の宗教となり、イスラーム法という形に固定されるに至ったイスラームは、外面的には実ががっしりした文化構造体になりました。しかし、その代り宗教が社会制度化し、政治の場となり、信仰の実存的なみずみずしい生命力は失われて枯渇しそうになってきたことも、また否定できない事実であります。まさに信仰の危機です。⁴

そして、この信仰の危機を克服するために発展してきたものとして、井筒は神秘主義を高く評価するのである。

イスラームはその律法性において完成すると同時に、精神性において死んだと主張する人々はこの点を鋭く突きます。しかしイスラームがその精神性において死んでしまったと判定するのは、いささか乱暴にすぎるのではないかと思います。なぜならば、イスラームの内部には最初期から宗教のこのような形式化に真正面から反対し、それと対決してきた精神主義の大潮流がありまして、現代もなおその生命力をいささかも失っていないからであります。それは今日お話いたしました律法主義を根柢からひっくり返してしまうような、猛烈な実存的内面主義の傾向です。⁵

このような理解は、日本の読者にとって、きわめて自然な、納得のいくものではある。しかし神の啓示（それはアラビア語ではすなわち法を意味する）した律法を解釈していく営為を形骸化への動きとして否定的にとらえる見方は、多くのイスラーム教徒の側からは一般的ではない。「律法主義を根柢からひっくり返してしまう」内面的な精神主義を肯定的なものとして表現することは、現在のイスラーム諸国の通常の信仰のあり方からは、通常であれば抵抗感が感じられ、忌避される、かなり特殊なものであることは理解しておいたほうがいい。

イスラーム教の最重要部分が法学であると認めつつ、思想史叙述においてこの側面にほとんど触れず、神秘主義思想の潮流を「精神性」において高いものとして重視する。また、神秘主義哲学を合理主義哲学より上位に置く。以上の構図による、明確な価値判断にもとづいたイスラーム叙述を井筒は行ってきた。

このような主観的な思想史叙述を行うことについて、井筒は『イスラーム哲学の原像』で次のように記している。

こうなればもう、「東洋」をどう受けとめるかは、個人個人の意識の問題である。そしてこういう観点からすれば、私が上に述べたことも、私自身の「東洋」意識にもとづいた、結局私だけの今後の仕事のプログラムのほかならないということになるだろう。だが、それは私にはどうにも仕様がなないことなのだ。主体的、実存的な関わりがない、他人の思想の客観的な研究には始めから全然興味がないのだから。⁶

井筒はほとんど開き直ったような口調で、主観的な思想史叙述を肯定している。それでは井筒の思想史叙述を方向づけた「主観」はどのように形成されたのか。次節ではこれを問いかけていく。

Ⅲ. 井筒の精神的原風景

井筒が「私自身の「東洋」意識」と自覚する、思想史叙述の軸を自らのうちに形成し発見していく過程ではさまざまな要素が介在していたであろう。ここではその一つとして、しかし出発点において決定的な意味を持ったとみられる要素として、井筒の育った家庭環境と修養に着目したい。井筒は自らの精神的原風景を、若き日の著作『神秘哲学』に記している。

本書に取扱ったギリシア的観照主義の哲学は、私にとって他のなにもものにもまさる懐かしい憶い出のたねである。元来、私は東洋的無とでもいうべき雰囲気のみわめて濃厚な家に生れ育った。「日々是好日」——私の少年時代から青年時代にかけて、家では全ての時間がある目に見えぬ絶対的なものの日常の実現をめざし、かつそれをめぐって静かに流れていた。⁷

この東洋的精神主義に満ちた家庭環境は、何よりも井筒の父の存在によってもたらされたものであった。

そしてこの生活の中心に父がいた。迂闊にもその頃は全然気づかなかったのだが、今にして思えば、私の亡父は非常に複雑な矛盾した性格の人物であり、彼の生活の静けさは奥ふかく不気味な暗黒の擾乱をかくした見せかけの静けさにすぎなかったのである。〔中略〕そういえば私がものごころついてから後にしばしば目撃した彼の修道ぶりは、生と死をかけた何か切羽詰ったものをもっていた。⁸

井筒は幼時に父からある修養を強いられる。井筒自身の筆によれば、この修養は以下のようなものである。

私はこの父から彼独特の内観法を教わった。というよりもむしろ無理やりに教えこまれた。彼の方法というのは、先ず墨痕淋漓たる「心」の一字を書き与え、一定の時間を限って来る日も来る日もそれを凝視させ、やがて機熟すと見るやその紙片を破棄し、「紙上に書かれた文字ではなく汝の心中に書かれた文字を視よ、24時の間一瞬も休みなくそれを凝視して念慮の散乱を一点に集定せよ」と命じ、さらに時を経て、「汝の心中に書かれた文字をもあますところなく掃蕩し尽せ。『心』の文字ではなく、文字の背後に汝自身の生ける『心』を見よ」と命じ、なお一步を進めると、「汝の心をも見るな、内外一切の錯乱を去ってひたすら無・心に帰没せよ。無に入って無をも見る

な」といった具合であった。⁹

IV. 直感と言語

井筒の父の内観法が、一見して禅の系統にある、神秘的な直接体験を体得させる修養法であることは明らかであるが、ここで重要なのは、それが言語や論理、そして概念や観念による介在を、究極的に斥けようとするものであることだ。少なくとも井筒の父にとって、この体得されるべき直接体験は、言語によって再現されたり分析されうるものではなく、そうすべきでもなかった。そして、幼時の（そして成人に近い日々までの）井筒俊彦は、父の影響下にあつて、言語を斥ける姿勢もまた受け入れていたようである。

しかしながら私は同時に、かかる内観の道上の進歩は直ちに日常生活の分野に内的自由となつて発露すべきものであつて、修道の途次にある間はもとより、たとい道の堂奥を窮めた後といえどもこれに知的詮索を加えることは恐るべき邪解であると教えられた。そしてまた事実、当時我々父子の共通の話題をなしていた碧巖録、無門関、臨濟録、その他禅宗祖師達の語録はいずれも私に「思惟すべからず、思惟すべからず」と知解の葛藤に墮する危険を戒めているように思われたのであつた。換言すれば私は、観照的生 *vita contemplativa* は登り道も下り道もともに徹頭徹尾、純粹無雑な実践道であつて、これについて思惟することも、これに基づいて思惟することも絶対に許されないと信じていた。ましてや人間的思惟の典型的活動ともいふべき哲学や形而上学が観照的生の体験にもとづいて成立し得るであろうとは夢にも思つてはいなかつた。¹⁰

井筒の父は、このような精神修養を行つていたものの、学者や宗教家ではなく、経済人であつた。井筒もまた、内観法によつて精神の安定を得、財界人として父のあとを継ぐこともありえた人生であつたかもしれない。しかし井筒は思想家としての道を歩んだ。その転機となつたのは、ギリシア哲学との出会い、正確に言えば、合理主義の展開として論じられがちなギリシア哲学の中に、神秘主義的な直感の作用するところを見出したときであつた。

だが、後日、西欧の神秘家達は私にこれとまったく反対の事実を教えた。そして特にギリシアの哲人達が、彼らの哲学の底に、彼らの哲学的思惟の根源として、まさしく *vita contemplativa* の脱自的体験を予想していることを知つたとき、私の驚きと感激とはいかばかりであつたらう。私はこうして私のギリシアを発見した。¹¹

ここに、幼時に父から強いられて体得した神秘主義的直感の体験と、高等教育から受容した、西洋諸言語による哲学的思弁の伝統の学知とがつながつた。井筒の生涯にわたる思想的関心がここにすでにほぼ完全な形をとつて現れているとすらいえよう。論理的・思弁的な哲学的思惟の根底に「脱自的体験」がある、という「私の」思想史観で、井筒の『神

『秘哲学』の全編は一貫している。そして井筒のギリシア哲学史叙述は、その後のイスラーム思想史への関心がどのような経緯からもたらされたのか、如実に示すものである。

井筒はソクラテス以前断片集を通読した最初の日に、「そこに立^{たちこ}める妖気のごときものが私の心を固く呪縛した」。

ソクラテス以前期の哲人達の断片的言句に言い知れぬ靈気が揺曳し、そこから巨大なる音響が迸出して来るように思われるのは、彼らの思想の根柢に一種独特な体験のなまましい生命が伏在しているからである。すべての根源に一つの宇宙的体験があって、その体験の虚空のような形而上的源底からあらゆるものが生み出されて来るのである。¹²

ギリシア哲学におけるこの「宇宙的体験」が、自らが幼時から受けてきた内観法の教育による神秘的な直接体験と重ね合わせて理解されたことは想像に難くない。そして井筒は、ソクラテス以前のギリシア哲学者がこの体験を言語化しようとしたことに着目する。「彼らの哲学はこの根源体験をロゴス的に把握し、ロゴス化しようとする西欧精神史上最初の試みであった」。¹³ 『はじめに思想があった』ではなくて、『はじめに直観があった』のである。自然神秘主義の超越的主体に端を発する、超越的「一者」をめぐる絶えざる思考の連続として、井筒はギリシア哲学史を描いていく。そこではプラトンの哲学は「パトスとロゴスとの奇しき合一であって、そのいずれか一方だけを見て、他を見ないもの真にプラトンを語る資格を持たない。プラトン哲学の特徴と考えられるイデアリズムは神秘主義的絶対体験のロゴス面であり、彼の形而上学説の各段階は深い超越体験のパトスの基体に裏付けられている」。¹⁴

ソクラテス前期の哲学において、あるいはプラトンにおいて、神秘主義的側面を発見することはそれほど目新しいことではないかもしれない。しかし井筒はアリストテレス哲学にもまた、その根幹に神秘主義を見出すのである。

現世に於ける人間生活の極致としての *vita contemplativa* の理念こそ、まさしくアリストテレス独特の人生観に由来する生の理念なのではなかったか。あらゆる種類の行為的実践的徳にたいして、知性的叡知的徳の絶対的優位を断固として揚挙したかのスタゲイラの哲人にとっては、神々の生にもまがう純粹観想の浄境こそ、何物にもかえがたい人生の醍醐味であり、地上的幸福の極致であった。¹⁵

アリストテレスすらもが神秘主義的底流を蔵していると主張する井筒は、プロティノスにギリシア哲学の展開の大団円を見出す。

アリストテレスを越えてプラトンへ——もしプロティノスの立場の歴史的意義を一言で表明しようとするならば、我々はおそらくこういう標語をもってするほかはない

であろう。アリストテレスによって定立された「思惟の思惟」を超え、「思惟の思惟」の彼方に、プロティノスは「一者」を描いた。しかしその「一者」即「善者」とは、かのプラトンの「善のイデア」を一段と深遠な相に於いて捉えたものにほかならなかった¹⁶のである。

プロティノスによって淵源とするネオ・プラトニズムは、哲学と神秘主義の潮流の双方においてイスラーム思想史に大きな影響を与えた。¹⁷ プロティノスのさらにその先を求めて井筒はイスラーム思想史に分け入ったといえよう。

むすびに：井筒思想と日本のイスラーム認識

井筒のイスラーム思想史叙述は、ネオ・プラトニズムの流れを吸収し、神秘主義と合理主義の強い緊張の下で、神秘主義の優位のもとに展開していくイスラーム世界の独自の宗教哲学の系譜に専ら重点をおいた。このことは、井筒が「私自身の『東洋』意識にもとづいた、結局私だけの」思想史を明確に標榜している以上、責められるべきことではない。

もし問題があるとすれば、井筒を高く評価し、もっぱら井筒の著作を通じてイスラーム思想史とイスラーム教を理解する傾向にある、日本の読者の側だろう。往々にして、日本の知識人は井筒のイスラーム思想史叙述があたかも実際のイスラーム思想史の全体像を覆っているかのような錯覚に陥る。井筒の描くイスラーム思想史が、神秘主義的側面を強調したことによって、多くの日本人の宗教観、思想観からみて受け入れやすく、親しみやすいものであった。それはイスラーム世界への好意的な思想潮流を日本に生み出すのに役割を果たした。しかしそのような日本にとって受け入れやすい部分を強調した理解が、真の他者の理解につながるとは限らない。現在の多くのイスラーム教徒にとって、井筒俊彦のイスラーム思想史叙述は、宗教の本来的ではない部分、異端的部分をのみ取り出したものとして批判を受けかねない。そのことは井筒のイスラーム理解に欠陥があったとか、不十分であったということの意味しない。しかし、井筒が興味を払わなかった思想史の側面の存在を思い起こし、イスラーム思想史を捉えなおすことは、日本のイスラーム理解のいっそうの発展につながるはずである。

1 本稿は2006年11月6日のカイロ日本研究大会で行った発表の原稿である。本稿を踏まえた「井筒俊彦の主要著作に見る日本的イスラーム理解」(『日本研究』第36集、2007年)と重なる部分がある。

2 『井筒俊彦著作集 5 イスラーム哲学』中央公論社、1992年、27頁

3 同、360頁

4 『井筒俊彦著作集 2 イスラーム文化』中央公論社、1993年、308頁

5 同、同頁

- 6 『井筒俊彦著作集 5 イスラーム哲学』中央公論社、1992年、336頁
- 7 『井筒俊彦著作集 1 神秘哲学』中央公論社、1991年、198頁
- 8 同、同頁
- 9 同、198-199頁
- 10 同、199頁
- 11 同、同頁
- 12 同、22頁
- 13 同頁
- 14 同、231頁
- 15 同、321頁
- 16 同、378頁
- 17 『井筒俊彦著作集 5 イスラーム哲学』1992年、354-355頁